

## ボランティア活動

JXホールディングス株式会社  
取締役常務執行役員

川田 順一



東日本大震災から1年2か月が過ぎた本年5月、私は、当社と当社グループ会社の社会貢献推進委員20名とともに、宮城県南三陸町と石巻市を訪問した。

訪問の目的は2つあった。1つは、我々が被災地に派遣したグループ社員のボランティア活動が被災地の皆様に対して、本当にお役に立てていたのかを検証することであり、2つ目は、大震災から1年以上が経ち、今、被災地がどのような状況にあり、今後、我々はどのような支援活動を行うべきかのヒントを探ることであった。

今回の大震災にあたり、当社グループは、事業面において、石油製品の安定的供給、電子材料部品の緊急生産、道路の早期補修（道路業界トップのNIPPOは当社グループの1社である）等に全力で取り組むことは当然であったが、企業市民の立場からの社会貢献活動の一環として、義援金の拠出、生活物資の提供のほか、初めて、グループ社員をメンバーとしたボランティア活動を実施することとした。幸い、この活動に対するグループ社内への関心は高く、多くの社員から応募があり、現在まで、約600名を宮城、岩手、福島各県の被災地に派遣し、民家の瓦礫や泥の撤去、漁具の清掃等のボランティア活動に従事させてきた。参加者からは、「被災者に感謝され、逆に、こちらが感動した」「被災者との絆を築くことができ、少しでもお役に立てたことに満足した」等の感想が寄せられたが、一方で、被災地の側から見て、「被災者の方々に本当にお役に立てたのか」、「我々の自己満足ではなかったか」、社会貢献推進委員の責任者の私としては、多少不安を感じていた。

今回の訪問では、南三陸町の消防署の署員と石巻市の社会福祉協議会の担当者に率直に感想を伺った。結論を先に述べると、「大変感謝している」とのことである。そして、最も感謝しているのは、労働や物資の支援に対してではなく、「被災者と会話の機会を設けてくれたことである」との言葉であった。家屋を失い、親族・友人を亡くした被災者が、今、最も欲しているのは、辛い思いや悲しい思いを聞き入れ、共に涙を流してくれる、そして、心の温もりを感じ合える仲間が存在であり、たとえ、短い期間の小さな活動であっても、親身になって会話を交えてもらえることこそが、被災者にとって大きな支えになっているとのことである。

そう言えば、今年の夏、私が南三陸町のボランティア活動に激励の視察を行った際のことを思い出した。その活動は、ある民家の排水溝の泥の撤去であったが、グループ会社の女子社員がその家のおじさんと話を始めたところ、最初は暗い表情をしていたおじさんが、時間が経つにつれて、笑顔を見せるようになっていた。話の内容は判らないが、その女子社員とおじさんとは、間違いなく、心のふれあいがあったのだと思う。

今後も、末永く、地道に、「対話」を大切にボランティア活動を展開していきたい。